

受験校選択ガイド

受験校選びのプロセスは？

STEP.1 まずは情報収集からスタート…20校程度を目安に

学校選びは先入観や偏差値だけで判断するのではなく、できるだけ多くの学校に足を運んでみることから始めましょう。第一志望以外の学校はよくわからないという場合でも、学校説明会や文化祭などに参加するうちに「通ってみたい!」と思える学校といくつか出会うはず。また資料だけではわからない魅力に気づくこともあるはずです。

STEP.2 受験候補をしぼりこむ…10校程度に

集めた情報のなかから、わが子に望む将来像と、学校の教育方針や大学進学への考え方がマッチする学校をしぼりこんでい

きます。教育の内容や大学合格だけでなく、通学時間や授業料などの現実的な条件についても検討してみましょう。

STEP.3 受験校を決定し、併願作戦を組む…6校程度

最終的な受験校は、塾の先生の意見や模擬試験の志望校判定なども参考にして選びましょう。大切なのは親子ともに「納得して進学できる学校」を選ぶこと。午後入試や(首都圏外からの)出張入試、ダブル出願といった多様化する入試を理解し、しっかり“合格”を手にするような併願作戦を組みましょう。

志望校選びに欠かせないポイントは？

難関大への合格実績や校舎や設備などの教育環境、口コミによる評判など、学校選びの基準はさまざまです。その中で共通しているのは「わが子が充実した6年間を過ごして、大きく成長できること」という点ではないでしょうか？ここでは学校選びで注目したいポイントを考えてみます。

●建学の理念・教育方針

どのような創立者が、どのような理念のもとで学校を創ったのか。私学には学校の“核”となる建学の理念や教育方針が必ず存在します。「こういう生徒に育てたい」という明確なビジョンを持った教育が最大の魅力といえます。各校の特色を理解した上で、保護者や受験生が求めている教育を実践している学校を選ぶことが大切です。

●授業の中身・カリキュラム

中高6年間で効率的なカリキュラムを組んでいる一貫校。系列大学～内部進学する付属校を除き、高2までに高校の履修範囲を修了して、高3の1年間は大学受験のための問題演習に時間を割く学校が多いのです。理解度に応じた習熟度別授業や長期休暇中の講習、宿題や小テストでの学習習慣作りなど面倒見の良さが特徴です。一方で、進学校には生徒の自主性を尊重するタイプの学校も多いので、どちらに向いているかも検討すべきです。

●伝統と校風

創立以来100年以上受け継がれてきた行事がある学校や、卒業後も先輩・後輩として長く付き合いの続く学校など、私学には、目に見えないけれど生涯役立つ“伝統の力”を持つ学校がたくさんあります。学校を見学したり、在校生・卒業生から話を聞くことで独自の“校風”を肌で感じてみることをおすすめします。

●行事・クラブ活動

高校受験の心配がいらぬ中高一貫校では、大好きなスポーツや文化活動に思い切り打ち込めるという利点があります。海外研修や校外学習など体験学習が充実している点も見逃せません。一方で、クラブはあるけれど活動は活発でないという例や、学費以外の費用がかさむという例もあるので、受験を考える際にはしっかりチェックしましょう。

●大学合格実績

難関国公立・私大の現役合格率では私立中高一貫校の圧倒的優位が続いています。週刊誌などで難関大への合格者ランキングが注目されますが、単純に合格者の数を比較するだけでは学校の実績は測れません。1人で複数の大学に合格すれば“のべ合格者数”としてカウントされますし、卒業生の数が大きく異なる学校を比べることもできません。現役合格率や合格者数が伸びている大学・学部など、経年変化や傾向を調べてみることも大切です。

●情操教育・人間教育

首都圏の私学のうち、約3分の1はキリスト教や仏教など宗教をバックボーンとしている学校と言われています。命の大切さや他者への思いやりなどを考えさせる機会が多く、人間的成長を重視した教育が行われます。宗教系以外の一貫校も芸術教育に力を入れたり、礼法や食育、キャリア教育など独自のプログラムを実施しているところが多くあります。12歳から18歳という心身ともに大きく成長する時を過ごす学校ですから、学習面以外の取り組みにも注目しましょう。

わが子に合う学校は?

比較的長い歴史を持つ伝統校に多いのが、男子だけ、女子だけで教育を行う学校。千葉や埼玉を中心に歴史の新しい学校も多く、最近では男子校・女子校からの移行も目立っている男女共学校。それぞれに特徴のある教育が行われています。子どもの性格や希望を考えながらぴったりの学校を選びたいものです。

●男子校

伝統の教育でリーダーを育成

「質実剛健」「文武両道」といった言葉が思い浮かぶ男子校。女子校に比べると学校数は少ないのですが、超難関の国立大合格者ランキングの上位に名を連ねる学校も多く、存在感は大。伝統校が多いだけに、独自の行事や実社会で活躍する先輩の存在など、目に見えない刺激がリーダーシップ重視の人間形成にも役立っています。中学までは女子の方が成長が早いので、おとなしい性格の男子に向いているという意見も。

●女子校

社会で活躍する自立した女性像を目指す

もともと数が多く、豊富な選択肢から学校選びができる女子校。男子に頼ることなく。学校生活のすべてを女子だけでこなすことから、良い意味でリーダーシップや自主性、積極性が育つと言われていています。「良妻賢母」育成型の伝統の情操教育を大切にしつつも、社会で活躍できる自立した女性の育成を掲げてキャリア教育に力を入れる学校が増えています。

●男女共学校

実社会と同じ環境でともに学ぶ

戦後に創立された学校や大学付属校に共学校が多く、埼玉や千葉では共学校が主流となっています。実社会と同じく、男女がともに学び、切磋琢磨することで教育的効果を大切に

にしています。共学校のなかには、授業はそれぞれの特性を生かすために男女に分かれて行い、行事などを合同で行う“別学・併学”と呼ばれる学校もあります。

進学校? それとも大学附属校?

中高を選択する際には、その先の大学受験を視野に入れた学校選びも大切になります。一貫校には併設大学を持たず、全員が大学受験することを前提とした教育を行う“進学校”と、併設大学への進学を前提にゆとりある授業を展開する“附属校”の2種類があります。最近では併設大学以外の他大学への進学指導にも力を入れている“進学校化する附属校”という存在も注目されています。併設大学よりもさらにレベルの高い大学を狙いたいという生徒のニーズに応える形で、併設大学への推薦合格を確保したまま、他大学を受験できるという有利な制度を持つ学校もあります。また近年は、人気難関大学の附属中学校が相次いで開校。注目を集めています。

“進学校”というと勉強漬けでは?と心配される保護者の方もいますが、部活動や行事に燃えて、勉強もしっかりこなすというバランスの取れた学校生活を送る場合がほとんど。大学受験に振り回されないゆとりが魅力の“附属校”を志望する場合には、どのくらいの成績を取っていれば希望の学部に進めるのかといった『内部進学事情』や、子どもの希望が途中で変わり、併設大学の教育内容と合わなくなった場合にどうするかといったことも考慮しておく必要があるでしょう。

バランスの取れた併願作戦とは?

受験校は4つのグループから併願するのが基本となります。

●挑戦校

受験の目標となる学校です。受験生かあこがれる第一志望の多くがここにあたるはずですが、本人の偏差値とその学校の80%ライン偏差値(模試の判定)の差が上限で7~8ポイントまでの学校が挑戦校としては妥当なラインといえます。

●実力相応校

本人の偏差値とその学校の80%ライン偏差値がプラス・マイナス2~3ポイント程度の学校が合格可能性の高い学校です。模試などで合格可能性が60~70%前後と出る学校までが実力相応校といえます。ここに第一志望の学校があるのが理想的ですが、現実には第二、第三志望校が位置する場合があります。

●安全校

現在の実力でゆとりを持って合格できる学校を安全校(押さえ校)と呼びます。注意したいのは、「合格可能性80%の学校は安全校」と言い切れない点です。20%は不合格の可能性もあると考え、80%ライン偏差値より下限が女子で5ポイント、男子で7~8ポイント程度と十分な差がある中から選ぶようにしましょう。

●事前受験校

第一志望校の入試前に、試験の雰囲気慣れ、合格をもらって自信をつけることを目的とする受験をすることが多くなっています。したがって難しすぎる学校にチャレンジして失敗し、その後の入試が怖くなってしまっは逆効果ですが、かえって、逆に奮起して成功する場合も考えられます。子どもの性格を見極めて受験を決めたいところです。

難易度に幅を持たせて確実な合格を目指そう!

志望校合格を目指して3～4年間準備を進めてきた子どもたちにとって、努力の“結晶”とも言える“合格”を手にするこ
とは、その後の成長にとって貴重な成功体験となるはずですが、入試期間はいままでにないプレッシャーを感じたり、急に体調
を崩したりすることも考えられるので、十分に余裕を持って合格できる併願校を考えておくことが大切です。下の表のように
難易度に幅を持たせ、バランスの取れた併願作戦を組めるようにするには「どうしても合格したい」という第一志望校だけでな
く、視野を広げてできるだけ多くの学校をリサーチしておく必要があります。

